

土川五郎氏著『律動的遊戯』

倉 橋 生

今夏文部省開催の保育講習會に於ける土川五郎氏の遊戯實習が講習者諸君に多大の満足を與へたことは著しいものであつた。その結果は驚くべき速度を以て諸幼稚園に此の遊戯が普及されつゝある。吾人の知る限りに於ても今夏以後同氏に遊戯講習を乞はんとする企てが三四にして止まらないのである。之れ實に喜ばしきことである。

今日の我國の保育界には不足して居るものが色々ある。理論の研究も愈々大に進まなければならぬが、保育資料の供給に就ても大に企畫せられ

なければならぬ。殊に保育資料は日々の實際の保育に當面の必要であつて、吾人は其の供給の急務なることを始終考へて居るのである。中にも幼稚園音楽と遊戯との資料は缺陷中の缺陷であつて其の材料の採取には皆容易ならぬ苦心をして居るのである。土川氏の新遊戯講習は、此の際に於て所謂大旱の雲霓を望む如きものがあつたのである。而して土川氏が疾くに此の方面の缺陷を憂ひ劇務の餘暇種々の苦心を以て此の實際的研究を試み之れを斯界に提供せられたる貢獻は大に感謝しなけ

ればならない。

従來の幼稚園遊戯の通弊は、土川氏の説の通り其の主知に偏する處にある。平たく言へば意味の歌と、觀念の所作とが主となり過ぎる處にある。

之れは此の事として必ずしも全然排すべきではない。そこにも價値があり必要もある。しかし、幼兒遊戯の一大主要件たる律動の尊重と適用に就ては、甚しく缺くる處があつた。平たく言へば運動それ自身の律動的價値の理解が不充分であつたのである。従つて、幼兒は歌の意味から考へて遊戯することのみ多くて、折角の歌曲——即ち音樂の中心要素——から導かれて、換言すれば其の律動に促されて遊戯運動に移つてゆくといふことが甚だ足りなかつたのである。土川氏の新遊戯には種

々の方面の多くの改良意見を含まれて居ること、思ふが、其の一番主として目ざして居らるゝ點は此の點にあるのではないかと思ふ。少くも吾人は此の點に於て、土川氏の試みの最も有意義なることを思ふのである。

かくの如くなれば、此の遊戯に於て最も大切なものは音樂である。其の曲譜である。之れが充分に力を持たなければ、此の遊戯法の眞意義は生じ得ないのである。土川氏が此の遊戯法を用ゆるものゝ爲に、其の曲譜を纂集して『律動的遊戯』と題し、之を出版せられることは最も斯界の幸としなければならぬ。敢て廣く紹介する所以である。

(東京小石川村上文美堂發行 フレーベル館販賣)

定價金參拾五錢)